

Hawaii Wedding Story

一生に一度の大切なハワイ物語

ハワイ挙式を『ファーストウェディング』で実現させたふたりの、実話をお届けします。
22回目となる今回は、シンプルにカジュアルにプランを組んだ、小園さまご夫婦の物語りです。

Photo: Megumi Text: Tsutomu Yoshida

Vol. 22

「飾らない 結婚式」

彼と出会ったのは、友人を交えた食事会の席。何気ない会話の中で、同じテレビ番組を観ていることがわかった。じつくり話をしてみると、好きなお笑いタレントがほぼ一緒で、笑いのツボもそっくり。一気に親しみが湧いて、自然な流れで連絡先を交換することになった。

穏やかな人柄が好印象だった彼女。初めてのデートで行った場所は、八景島シーパラダイス。第一印象どおり、彼女は常に安定したテンションで、気分屋の僕とはまったく違う。それからデートを重ねるごとに、自分がないものを持っている彼女に惹かれていった。

交際がスタートしてから、私は転職した。それまでは、仕事帰りに食事に行くことが多かったけれど、土日にとにかくさん出かけることができるようになった。優柔不断な性格の私にとって、決断力のある彼はとても魅力的だった。お互いが背伸びをせずに行われる関係は想像以上に心地よく、ごく自然に結婚の話題を口にするようになった。

プロポーズをした場所は、僕の部屋。堅苦しいシチュエーションでサプライズ的なことをするのが好みではなかったし、彼女からも「プロポーズはかしまらなくていいよ」と

言われていた。なので、率直に「結婚しても仲良くしていこう」と想いを伝え、OKの返事をもらえたときは、心底うれしかった。

入籍したのは2016年7月。気づけば、食事会で出会ってから4年を超える月日が流れていた。

一般的には、入籍から間を開けずに式を挙げるカップルが多いと思うけれど、私たちは結果的に、準備期



改めてファーストウェディングを訪れたのは数カ月後。すっかり忘れられているかと思っていたが、担当のNさんは僕たちを覚えていてくれた。当初、僕たちには「屋外で式を挙げたい」というぼんやりとしたヴィジョンしかなかった。そこで的確なアドバイスをしてくれたのが、フランクな性格でとても話しやすいNさん。僕たちの「まったり感」を理解してくれた上でのさまざまな提案のおかげで、少しずつ具体的なプランを詰めていくことができた。ほかの1社と比べて、要望を聞き入れてくれる柔軟性があり、予算内の金額だったことが、ファーストウェディングを選ぶ決め手になった。

間がとて長くなくなった。ハワイで式を挙げたいという希望は、以前から彼に伝えていた。過去に2度旅行に行ったことがあり、開放的な空気に魅了されていた。いろいろとウェディング会社を調べる過程で、2社から資料を取り寄せ、それぞれで打ち合わせを行った。その直後、式に招きたかった姉の妊娠が判明。式を挙げる時期について、しばらく悩むことになった。

私たちは、シンプルな挙式を望んでいた。海が見える開放感のある場所で、みんなが笑っていられるウェディングが理想的だった。そんな経緯もあり、会場はもちろんまりとしたブルメリアガーデンに決定。ビーチに面した緑豊かなガーデンは、理想にピッタリだった。式場に続いて、細かいプランを詰

めた。パーティーの延長のような式にしたいという彼の希望もあり、服装はややカジュアルにした。彼に至っては「ハーフパンツを履く」と譲らなかつた(笑)。ほかにこだわったポイントはブーケ。せっかくのガーデンウェディングなので、グリーンをメインにした彩りにした。

いよいよ挙式当日。午前中は、アルバムのフォトツアーへ。Nさんの提案で選んだビーチはいわゆる観光名所ではない穴場スポット。地元の人から「いいチョイスだ。センスがいい」と褒められた。

僕たちは海より緑の方が他の人と違って気に入っている。フォトグラフアリーのMEGUMIさんはとにかくセンス抜群。撮影中は笑顔が絶えなかつた。

そして午後、ついに挙式を迎えた。ファーストミートは、宿泊したモアナサーフライダーのロビー。リムジンで会場へ向かうと、出席者の親族がアロハ姿で出迎えてくれた。

私は涙もろい性格だから、開放的なガーデンウェディングを選んだのは大正解。心地いい風を浴びながら、終盤まではずっと笑っていられた。けれど、最後、両親にレイをかけるとき、母親の涙を見てもらい泣き。さまざまな思いが去来して、胸がいっぱいになった。

僕たちらしい自然な挙式ができたのは、ハワイの本当の素晴らしさを理解している専門店だったからだと思う。でも、ちょっぴり遊び足りなかつたので、今度はふたりにハワイに来て、ゆっくりとバカンスを満喫したい。